

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380796

研究課題名(和文)「不在の感覚」から生成される社会福祉実践 - 「中動相」の地平に着目して -

研究課題名(英文) Social Work Practice Generated from Social Workers' Sense of their Own Lack of Competence: Focusing on the Middle Voice

研究代表者

福田 俊子 (FUKUDA, Toshiko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：20257059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ソーシャルワーカーがする自己変容の契機となった臨床体験の構造を捉えることを目的とし、精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーを対象としたインタビュー調査を実施し、事例研究法を用いて分析した。その結果、臨床体験は「中動相」で生起している事象であり、「巻き込まれ - 巻き込まれ続けている」ことを基底とし、「問われる - 応答する」及び「教わる(「不在の感覚」の生起)」という構造を有していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, an interview survey of psychiatric social workers was conducted with the aim of grasping the structure of clinical experiences that triggered their self-transformation as social workers. Data was analyzed using a case study method. The results indicated that clinical experience is an event occurring in the "middle voice", is based on "getting involved and remaining involved", and has a structure of "being questioned and responding (generating sense of their own their lack of competence)" and "being taught".

研究分野：社会福祉

キーワード：中動態 ソーシャルワーカー 自己生成 事例研究法 ナラティブ・アプローチ

## 1. 研究開始当初の背景

2000年以降、ソーシャルワーカー(以下、ワーカー)を対象とした自己生成プロセスに着目した研究が活発に進められるようになってきたが、いずれも「専門的自己(professional self)」にのみ焦点をあて、その変容の基軸を「実践能力」(保正2013)や「自己規定」「対象者観」「関係性」(大谷2012)、「援助観」(横山2009)などに規定し、実践構造や変容の契機を要素として分解して概念化し、その概念間の関連を示すものであった。

これに対し筆者は、こうした概念化をする以前に、元来、「『ワーカー』という専門家になることが、どのような事象であるか」を捉える必要があると考え、とりわけ失敗や憤りなどといったネガティブな感情が伴う体験、すなわち「痛みとして捉えられる臨床体験」に焦点をあてたインタビュー調査を実施し、「時間性」及び「受動性」の観点からデータを解釈・記述してきた(課題番号23530775、以下、第一次調査)。その結果、以下の点が明らかとなった。

第1は、専門的自己の生成に影響を与えているのは、「思いがけない体験」すなわち「予測できなかった体験」であるという点である。いずれも、ワーカー自らが意図してかわり、予測通りの結果が得られた体験ではなく、「体験してしまう」といった「受動性」、及びそのような「体験と出会ってしまう」という「偶然性」を孕んでいた。

第2は、「利用者にふりまわされる体験」や「状況に巻き込まれる体験」などを通じて、初学者や初心者はもちろんのこと、達人においても「専門家としての自己の無力さ」が語られている点である。こうした「行き詰まる」ことによって、ワーカーは専門的自己に不足しているものの自覚を促す「不在の感覚」を基点とし、専門的自己と個人的自己をつなぐ専門家の基盤を形成していた。

第3として、ワーカーの自己生成プロセスには「節目」があり、「節目」は専門家の基盤を支える「人としてのあり方」に問いを投げかける臨床体験との出会いであり、その体験は、必ずしも「痛み」として捉えられるものだけではないことが明らかとなった。

第4は、ワーカーの実践が、援助「する」ことを志向する能動性から出発するも、無力感と共に「いる」ことしかできなくなる受動性へと移行するプロセスを経ながら、能動でも受動でもない「ひとりの人として時間を共有するように『なる』」という中動相の地平に開かれている可能性も示唆された。

しかしながら、「不在の感覚」が生起するような臨床体験そのものの構造、及びこうした臨床体験がワーカーの自己生成の過程に与える影響などについては明らかにすることはできず、課題として残された。

## 2. 研究の目的

そこで筆者は、「不在の感覚」にまつわる臨床体験に関する調査(第二次調査)を実施することによって、この感覚を基点とした社会福祉実践の過程で生起する事象及びその構造を明らかにすることを当初の目的とし、本研究を進めてきた。ところが、第二次調査を実施するにあたり、再度、第一次調査のデータを詳細に分析してみたところ、「節目」すべてが「不在の感覚」を伴った臨床体験と関連している訳ではないことが明らかとなった。

したがって本研究では、対象とする臨床体験を「不在の感覚」に限定せず、これまでの研究と同様、ワーカー自身が重要と捉えているすべての臨床体験を対象として「時間」「空間」の観点から解釈し分析し、その構造を明らかにすることを目的にした。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究方法

本研究では、ワーカーの自己生成モデルを開発するのではなく、インタビュー調査で得られたデータの詳細な分析により、臨床体験の構造を明らかにすることを目的とするため、GTAやM-GTAといった概念化の手順を含む質的研究方法ではなく、「事例研究法」を用いることとした。

### 2) 調査概要

研究目的を変更したことで、すでに実施を終了している第一次調査(調査A)のデータを、再度より詳細に分析した。その結果、複数の調査協力者(以下、協力者)より、ここ10数年におけるワーカーを取り巻く職場環境が、自己生成に少なからず影響を与えているという内容が語られたため、協力者を臨床経験10年以下のワーカーとした調査Bを実施した。

#### (1) 調査A

協力者16名は、全員精神保健福祉士の資格を持つ現職のワーカーである。そのうちの11名は、世界心理社会リハビリテーション学会によって、ベスト・プラクティスとして選ばれたことがあり、筆者らが2006~2008年に実施した調査にも協力いただいたA地域の事業所等に勤務するワーカーである。しかし、こうした実践が標準的な臨床の状況ではないため、特徴的な活動が必ずしも展開されてきたわけではないB地域で実践を積み重ねてきたワーカーを、協力者として5名追加した。いずれの調査も、2012年8月~2015年3月に実施した。

#### (2) 調査B

協力者9名は、調査Aで協力いただいたB地域の協力者が勤務する職場のワーカーであり、全員が精神保健福祉士の資格を有する。調査期間は、2018年2月~3月である。

### 3) 分析方法

協力者から得られたテキストは、インタビュー調査で聞き手と話し手の相互作用によって生成された、いわば「対話的構築」(桜井: 2005・38-39) の場から生成されたものである。臨床体験が生起してくる状況、体験同士のつながり、協力者の特徴的な語り口やその変化まで、テキストには、実に多様な事象が埋め込まれている。

Stake (1995) も、事例は「単一体であるが、同時にさまざまな要素の結合体」だと言う。したがって本研究では、テキストの中で捉えられる事象はすべて、分析の対象とした。

本研究では、協力者1人から数回にわたって実施されたインタビューで得られたテキストは「事例」、各協力者のテキストのうち、本人によって重要あるいは何らかの影響を与えたと捉えられた臨床体験がある程度まとめられているテキストを「エピソード」と呼び分析した。

また、分析にあたっては、ナラティブ・アプローチや現象学の知見を活用した。

### 4. 研究成果

- 1) 自己生成は「自己」の内に専門的自己を形成し、再び「自己」へと立ち戻る過程である

社会福祉専門教育を受けている初学者の段階や入職後の初心者・新人の段階では、自己の内に専門的自己という異物が混入することで、個人的自己と専門的自己という二つの自己が生成され、直接支援や間接支援に必要とされるさまざまな技能などを習得していくことで、専門的自己は異物としてバラバラでまとまりのないかたちで、拡散、増殖する。そうすることで、自己は初めて個人的自己を意識するようになり、次の一人前段階へ移行する間に、専門的自己は一つのまとまりをつくらうとする。

しかしここで「大きな節目」が訪れることで、構築されてきた専門的自己はいったん解体され、知識や技術といった自らに不足しているものが自覚されるようになり、それを獲得しようと実践を続けることによって、専門的自己は一つのまとまりとなって確立され、一人前となる。

そして一人前の段階以降になると「小さな節目」が訪れ、新たな専門的自己の解体と構築が繰り返されることで、個人的自己と専門的自己が相互に浸透し、両者の境界はあいまいになる。その後、さらに構築と解体を繰り返すことで、両者の境界は消失し、再び自己へと立ち戻っていき、達人の段階に至るのである。

ワーカーの自己生成とは、「自己」の内に専門的自己を形成し、専門的自己と個人的自己の交錯を繰り返しながら、再び「自己」へと立ち戻る過程であり、低次から高次へと移行する成長・発達段階モデルとは異なるもの

であることが明らかとなった。

- 2) 変容の契機となる「節目」は、6つに分類される臨床体験である

事例を分析した結果、抽出されたエピソードを分析したところ、図1のように分類された。

図1 「節目」となる臨床体験の種類



「大きな節目」は技能習得が十分ではない「一人前」となる手前で生起し、ワーカーとしての「原点」や「転機」となる臨床体験であり、ワーカーに対し急激な自己変容を促す事象である。

一方「小さな節目」は、「大きな節目」とは異なり、必ずしも「体験の只中」で自己変容が促されるわけではなく、ゆるやかな自己変容が促され、その臨床体験をくぐりぬけることで、ワーカーに初めて変容の契機であったことが自覚できるという特徴を有する。つまり「小さな節目」は、ワーカーによって言語化することが不可能であるような、微細な自己の更新がなされ続けていく先で出会う体験なのである。

「大きな節目」のうちで、臨床経験 20 年未満の事例における「転機」は、主として利用者との関係において「ふりまわされ」たり、「追い詰められ」たりする挫折体験であった。利用者との二者関係に閉じ込められるがゆえに、トラブルを抱え込み、追い詰められるのであった。そして、一人で問題を抱え込むことができなくなった協力者の専門的自己はいったん解体し、その後は上司といった他者に相談することで問題を解決するようになる。

以上のような体験を通して、ワーカーは「他者の助言を活用する」というスキルを身につける(福田 2012: 36-37) と同時に、利用者との二者関係のなかだけで問題を抱え込むのではなく、上司といった第三者を含んだ三者関係のなかで仕事を展開する必要性を学習する。これを換言すれば、状況に対して「自己を閉ざさないままでいること」の重要性を学んだ体験であるとも言えよう。

「原点」となる体験も同様である。例えばある協力者は、保護室の鉄格子の向こうから利用者に「お前は何者なのだ」と問いかけられた体験が、ワーカーとして原点となり、専

門家としての基軸を生成していた。臨床経験の積み重ねは、時として臨床という「現在」に自己を埋没させて「自己を閉ざす」ことで、自己変容を拒絶することがある。そのようなにならないためには、「自己を閉ざさないままにしていること」、すなわち、こうした原点となる臨床体験を経験した「過去」に立ち戻りながら、専門家としての基軸を生成し、専門家としての「未来」の自己を生成していくのである。

一方、「小さな節目」は、「これまでの実践が肯定される体験」及び「業務のルーティン化による実践の固定化にゆさぶりをかけられる体験」という、相反する内容に大別される。前者には、これまでの実践が肯定・強化される体験、後者には、これまでの実践等に問いが投げかけられる体験、新たな価値や視座が与えられる体験、新たなワーカーとしての役割が求められる体験が該当する。

なかでも、「これまでの実践が肯定される体験」に属するエピソードの分析からは、協力者自身が急激に自分の実践を意味づけしてしまわずに「棚上げ」しておくことの重要性が示唆された。

### 3)「節目」となる臨床体験は、中動態で生起する事象である

「原点」や「転機」となる臨床体験は、いずれも利用者や職員関係を中心とした臨床における状況に「巻き込まれる」こと、すなわち本人の意思とは関係なく、否応なしにかかわりをもたせられてしまうという状況から働きかけられる事象が基底となり、自らが「問われる」ことへとつながっている。状況から距離をとり、巻き込まれることのない体験は、「問われる」ことにはつながらない。自己を関与させ続けているからこそ協力者は問われ続けるのである。

そして問われた後に、その内容が具体化され、自分に不足している価値や技能などが指し示されること、すなわち「教わる」という事象が生起する。

「節目」とは、関係や状況に「巻き込まれる」ことを基底として、自分の実践などが「問われ」、それによって自分に不足している価値・知識などを「教わる」という円環構造をなしているのである。

また、「問われている」という自覚が、「不在の感覚」を生成し、引いてはそれが「教わる」という事象へとつながっていくのである。

状況に「巻き込まれ」て、「教わる」という過程のあいだに、「問われる」がある。「問われた」ことが「教わる」ことにつながるためには、「問われた」ことに対して「応答する」行為が伴わなければならない。「問い」が生起する背景には、「問われる受動」と「応答する能動」が常に交差する運動がある。す

なわち、「問われる」事象は「問いと応答」の往還構造となっている

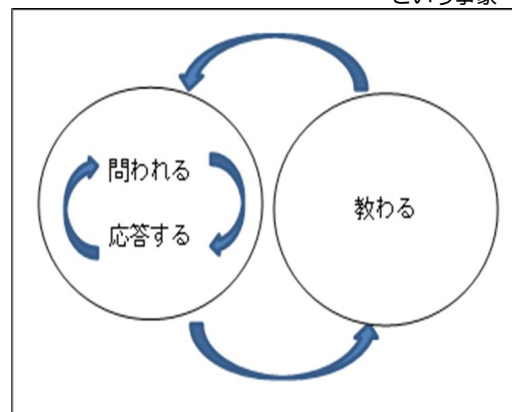
そして「問い」への「応答」には、二つの形式がある。一つは、例えば病棟の社会化といった具体的な実践を展開するという「応答の外在化」である。もう一つは、問いを自己の中で思考するという「応答の内在化」であった。自らの実践の意味を自問自答することである。

これは、失敗体験を事例のように「客観的・対象的なもの」(木村 1982:8)としてみなし、「自己の外」へと投げ出すことはせず、「問いと応答」の往還構造のうちで「応答の内在化」を維持し続けることで、協力者たちは、この体験を「きっと忘れることはない」出来事として捉えるようになるのだった。

「節目」とは、状況に「巻き込まれる」ことで「問われ」そして「応答」し、「教わる」過程を経て、再び状況などに「巻き込まれる」ことへとつながっていく円環構造そのものである。そして円環構造に「巻き込まれ続け」て、その構造内に「居続けること」によって、当初の「巻き込まれる」という事象は「巻き込まれ続けている」事象と一体化されていく。

以上のようなプロセスにおいて、ワーカーは、専門的自己の構築・解体を繰り返していくのである。つまり、「節目」となる臨床体験は、「巻き込まれ-巻き込まれ続けている」事象そのものなのである。(図2)

図2 「巻き込まれる-巻き込まれ続けている」という事象



國分(2017)は、現代社会における「能動/受動」の対立は、「する/される」の対立であり、「意思」をもって行為をなしたかが問われると言う。そして、現代社会から古代ギリシャにまで遡り、フランスの言語学者である E.Benveniste (1966 = 1983) による言説を引用しながら、当時の文法には受動態という概念はなく、能動態と中動態が対立していたのだとする。

能動における動詞は、「主語から出発して、主語の外で完遂する過程」を示すのに対し、中動の動詞は「主語がその座となるような過

程を表している。主語は過程の内部にある」と定義される。古代ギリシャの言語における「能動/中動」の対立には、主語の所在が過程の内か外かが問題とされ、「意思」は全く関係ないとされるのである。

「節目」となる臨床体験は、状況に「巻き込まれる」という事象から出発するため、ワーカー自身がその過程の内部にいることとなる。したがって、Benveniste の定義に従えば、「節目」となる臨床体験は、中動態で生起する事象となる。

さらに國分は、M.Foucault の権力論を用いながら、権力を行使する者は、権力で相手に行為させるのだから、行為の過程の外に在るとし、その行為は「能動」になると言う。それに対し、権力によって行為させられる行為者は、行為の過程の内にいるから「中動」となる。

しかし、ワーカーになるということは、権力をもって利用者とかかわることでもある。だからこそ、権力をもつ状況から逃れるために、ワーカーは利用者との対等性を担保しようと、「関係性」を重視した実践を展開しようとする。しかし、臨床経験を積み重ねるごとに、権力から逃れることは難しくなる。

臨床経験を積み重ねる過程において利用者との関係で訪れる「節目」は、ワーカーが利用者によって行為させられるという「ふりまわされる」体験が象徴するように、権力を行使する者とされる者が反転する事象である。つまり、「節目」となる臨床体験は、権力を行使する者であったワーカーが、権力によって行為させられる利用者との関係に巻き込まれることで、両者ともが「中動」となる事象である。

一般的にワーカーによる「援助行為」は明らかに主体の外で完遂する過程である。しかし「節目」の体験においてはそうはならない。なぜなら、それは状況に巻き込まれるなかから生起するため、行為そのものは主体の外にあるのではなく、巻き込まれる過程の内部にあるからである。つまり、「節目」となる臨床体験は「能動」と「受動」が反転したり、交差したりする「中動態」で生起する事象なのである。

また、ワーカーが自らの臨床体験をモノ化せず「巻き込まれ続ける」ことを可能にするためには、いくつかの「装置」が必要であることが明らかになった。一つは、調査で「守られて育った」「フォローしてもらえ安心感がある」と語られたような、所属組織内における上司と部下、あるいは同僚同士の関係を基盤としたワーカーの支援組織である。もう一つは、所属組織以外で、ワーカーを支援する装置、すなわち J.Lave and E.Wenger (1991=1994) が言うところの「実践共同体」をつくることである。

#### 4) 今後の課題

本研究を通じ、臨床の状況が変化しても、ワーカーの自己生成における「節目」となる臨床体験は、中動態で生起する一定の構造を有する事象であり、自己生成にはある種の「装置」が必要であることを明らかにしてきた。今後は、こうした装置がどのような構造をもち、自己生成にどのような影響を与えているについて、さらなる調査を実施することで探求していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

福田俊子「ソーシャルワーカーの自己生成過程における専門的自己の構築と解体 - 中動態から生起する臨床体験 - 」、法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士論文、2017年3月

福田俊子「ソーシャルワーカーの基盤を形成する臨床体験の構造 第1報 - 自己生成プロセスにおける「節目」の臨床体験がもつ意味 - 」、『聖隷社会福祉研究』、7号、14-32頁、2017年1月、査読有

福田俊子「ソーシャルワーカーの基盤を形成する臨床体験の構造 第2報 臨床経験6年目のワーカーの事例分析 」、『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』、13号、9-22頁、2015年3月、査読有

福田俊子「ソーシャルワーカーの基盤を形成する臨床体験の構造 第1報 自己生成プロセスにおける「節目」の臨床体験がもつ意味 」、『聖隷社会福祉研究』、7号、14-32頁、2015年1月、査読有

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田俊子 (FUKUDA, Toshiko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：20257059